

令和7年度総務産業常任委員会行政視察報告

総務産業常任委員会は、令和7年11月4日から11月5日までの2日間、三重県菰野町及び愛知県名古屋市において視察研修を行った。

1. 三重県菰野町 御在所ロープウェイ株式会社 「高原観光開発について」

■御在所ロープウェイ

年間を通じ、四季折々の自然や絶景を楽しめる人気の観光スポットで、昭和34年に約4億円を投じて建設したロープウェイを中心に、展望台、レストラン及び売店があり、駐車場、トイレ、案内所などの基本的なインフラも整備されている。

山頂とその周辺には、ハイキングコースや遊歩道が整備されており、自然散策も楽しむ事ができ、年間約50万人（全盛期は90万人）が訪れている。

ロープウェイの概要

全長約2.8kmのゴンドラ式ロープウェイで、標高差約600mを登る。

3線自動循環式

最高支柱（鉄塔）高 61mは日本一の高さ

所要時間は約10分

■建設までの経緯

三重県の御在所岳（ございしょだけ）は昔から登山や観光の名所として知られており、多くの観光客や登山者が訪れていたことから、麓の湯の山温泉を含め、御在所岳の自然の魅力をより多くの人々に楽しんでもらいたいという観光振興の意図があった。また、山岳地帯へのアクセスを容易にし、観光客の利便性を高めるためにロープウェイの導入が検討された。

■建設後の維持管理

平成21年（50年目）には、架け替えの検討がされ、約35億円と試算されたため、令和元年（60年目）に架け替えを予定していたが、東京オリンピック開催やリニア建設の影響もあり、人員不足と資材費の高騰を受け、再試算をしたところ約75億が提示され、架け替えを断念した。

結果、令和元年（60年目）から3年間で15億円をかけて、古くなったモーター等の交換、新たに展望レストランを建設するなどし、リニューアルを行っている。

このほか、定期的にワイヤーの交換、鉄塔の塗装し直しなどを行っている。

■説明者より

素晴らしい景観を年間通じてみてもらいたいとの思いから始まったため、輸送手段として考えておらず、いつ来ても乗れるように交走式でなく、循環式をにしたが、交走式に比べ、維持管理費はかかる。また、旅客鉄道に分類されるため、よっぽどのがない限り運行しないといけないし、とにかく安全が一番である。

高原観光であるため、バリアフリー対策などは、最低限の対応としている。本来であれば全施設のリニューアルをしたいところだが難しい。

観光業はとにかく人員が必要となる。特に繁忙期はアルバイトの確保も大変で、時給が高い市街地に流れてしまう。過去には、ホテル営業なども行っていたが、コロナの影響や人材不足もあり、令和3年に廃止とした。

菰野町一の観光地であるため、行政とのつながりもあるが、特にお願いしているのはインフラの整備で、特に道路の問題（冬季の凍結）と駐車場の不足と渋滞問題は相談している。

町としては4万2千人の人口があり、三重県で一番の町。ベッドタウンとして安定しているので、無理に人を呼び込まなくても良いが、やはり素晴らしい環境があるからこそだと考えている。

■視察所感

- ・決まった季節だけでなく、季節の移ろいを強みとしており、担当者からも、その地域にある資源を再確認し、磨き上げていくことが大切との話があった。
- ・高ボッチ高原の観光について、今できる事、時間をかけて調査・検討していく事を整理する必要がある。
- ・御在所ロープウェイは、温泉地が近くにあることも強みである。
- ・施設運営に関して、維持管理や利用客の動向など、具体的な課題等を知ることができた。
- ・平日であっても駐車場は満車に近い状況で、駐車場等の整備が大切だと感じた。
- ・公共交通機関を利用する人よりも、自家用車を利用する人の方が多い。
- ・駐車場近くの土産店には寄っていくが、宿泊までする人は減っている。
- ・リピーターを確保できるよう、定期的なイベント企画が必要であると感じた。
- ・自主財源の確保に向け、「稼ぐ」施策の一つとして観光振興に対する機運も高まっているため、この事例を参考とし検討していくべきである。
- ・レンゲツツジで有名な湯ノ丸高原では、保全活動がしっかり行われているので、高ボッチ高原でも保全活動に力を入れていく必要がある。
- ・足元にある宝物・魅力を見つける、再認識することが大切。
- ・一度、開発に携わるような専門家の話を聞く機会を作りたい。

2. 愛知県名古屋市熱田区 名鉄プロパティマネジメント株式会社 「商店街の再開発について」

■あつたnagaya

名古屋鉄道（名鉄）が、神宮前駅（名古屋市熱田区）西街区で進めてきた再開発の一環として設けられた商業施設で、地域で継がれる魅力を嗜み、再発見できる場所として、地域の老舗や地元の食文化、名古屋らしさを活かした店舗を集めた施設。

建材には、愛知県産のスギ、ヒノキを多用し、伝統的な木造建築の良さを出したデザインで、地域らしさと温もりを感じられる。

また、隣接する熱田神宮周辺は、江戸時代には宮宿（あつたのみやじゅく）として東海道の宿場町だった歴史もあり、その宿場町＋参拝地としての歴史的な価値を改めて活かし、旅人が立ち寄る街、地域の賑わいの拠点とする試みがある。

■建設までの経緯

熱田神宮の参拝客は多いものの、周辺の商店街や街並みに賑わいが戻らず、周辺地域の活性化が長年の課題となっていた。特に神宮前駅周辺は、熱田神宮の玄関口でもあるため、観光客が立ち寄りやすい新たな拠点づくりが求められてきた。

2010年頃 課題認識

2020年頃 構想検討

2021－2023年頃 設計・施設名称を決定。

建設工事が進行

2024年 第1エリアの先行開業を経て、全面開業

■取り組みの成果

産廃前後に立ち寄れる飲食・物販・休憩機能が集約されたことで、「参拝のみで帰る動線」から「滞在・回遊する行動」への転換が見られるようになり、神宮前駅～熱田神宮間の人の流れが可視化され、駅前空間の活用度が向上している。

また、単なる商業施設ではなく、地域文化を媒介する観光資源として機能しており、地域性を尊重した持続可能なまちづくりの好事例となっている。

今後も、雇用創出、来訪者増加による周辺店舗への波及効果が期待されている。

■説明者より

開発の目的としては、停滞していた熱田のまちの活性化、及び観光地化へ向けた素地づくりを目的としており、ターゲットは熱田神宮への観光客と将来的にはインバウンド客の流入も想定していく。

始めは、駅と直結した百貨店のような施設も検討していたが、工事費の高騰などもあり、平屋で長屋風の施設に切り替えた。結果的に地域にマッチした。

駅前を開発したことにより、北側にある未だ開発に至っていない商店街にも足を運ぶ人が増え、少しではあるが、頑張っている飲食店等の誘客にもつながった。

今後、神宮前駅の近くに「劇団四季」の劇場も移転してくる予定で、さらなる誘客の相乗効果に期待している。

駅外の開発だけでなく、多くのお客様を迎えるにあたり、駅階段やエレベーターなども改修を進めている。

駅の北側の古い商店街の開発は、名古屋市の管理となっているが、所有者や管理者が不明な店舗もあり、とても苦労していると聞いている。また、愛着を持ってお店を続けている方もいる。

鉄道を中心で考えれば問題ないが、駐車場などを含め、観光バス等を迎え入れる体制を整えておくともっと良かったと感じている。

別の賑わいのある駅前と同じことをしてもダメで、その地域に合った施設にする方がいい。

インバウンドへの対応としては、今のところ案内板標記（英語表記）くらいとなっている。

■視察所感

- ・年間約700万人もの参拝者が訪れる一方で、周辺の熱田神宮前商店街ではシャッターを閉める店舗が目立っていた。
- ・参拝客や観光客を神宮駅前周辺に回遊させることで、地域の賑わいと活性化につながっている。
- ・木造の長屋風店舗に、名古屋めしや地元企業の魅力を詰め込み、地域の歴史や文化を現代風に再構築する工夫が随所に見られた。
- ・地域住民、観光客、参拝者が自然と交わる場所づくりの取り組みは、今後の塩尻市の拠点づくりにも参考になる点が多い。
- ・熱田神宮という大きな観光の目玉の活用がポイントとなり、参拝客を商店街に滞在・回遊させる取り組みに成功していると感じた。一方で、各店舗の店主や地域住民の意思がどのように結集しているかが分かりにくかった。
- ・移動しなくても多種多様な店舗を楽しめて、敷地内に公園のようなゆっくりできる休憩スペースもありいいと思った。